

令和 3 年 5 月 15 日現在

機関番号：32653

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12108

研究課題名(和文) 日本版エンド・オブ・ライフ・ケアの提供に必要な看護師のコンピテンシーに関する研究

研究課題名(英文) Cultural competency for nurses in providing Japanese style end-of-life care

研究代表者

笹原 朋代 (SASAHARA, TOMOYO)

東京女子医科大学・看護学部・教授

研究者番号：70528223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：この高齢多死社会において、エンド・オブ・ライフ・ケアを必要とする人が多い中、文化的アイデンティティに応じたエンド・オブ・ライフ・ケアを提供できることが望ましい。わが国の文化に根差した日本版エンド・オブ・ライフ・ケアを提供するために必要な看護師のコンピテンシーを明らかにすること目的として研究を行った。看護師ならびにエンド・オブ・ライフ・ケアの文化的コンピテンシーに関する文献検討と研究者間の討議に基づき、エンド・オブ・ライフ・ケアを提供する看護師に必要な文化的コンピテンシーの定義を作成するとともに、文化的コンピテンシーを高める教育プログラムの内容について整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護師の文化的コンピテンシーに関連した膨大な知見が十分に整理されていない中、本研究では、それらの研究動向を把握し、日本版エンド・オブ・ライフ・ケアを提供するために必要な看護師の文化的コンピテンシーの定義を作成することができた。さらに看護師の文化的コンピテンシー向上に向けた教育介入研究の課題を整理した。本研究を通じて、より有効性の高い教育プログラムを開発することが可能となる。

研究成果の概要(英文)：Many people need end-of-life care in this aging and dying society, and it is desirable to be able to provide end-of-life care according to their cultural identity. A study was conducted with the aim of clarifying the competencies of nurses necessary to provide a Japanese version of end-of-life care rooted in Japanese culture. Based on literature reviews of the cultural competencies of nurses and end-of-life care and discussions between researchers, the definition of cultural competencies required for nurses providing end-of-life care was developed, and the content of educational programs to enhance cultural competencies was organized.

研究分野：緩和ケア

キーワード：文化的コンピテンシー エンド・オブ・ライフ・ケア 看護師

## 1. 研究開始当初の背景

この高齢多死社会において、エンド・オブ・ライフ・ケアを必要とする人は多い。人生の最期の時期をどこでどう過ごすか(過ごしたいか) どういう最期を迎えるか(迎えたいか)は、生まれ育った文化に影響される。そのため患者は、文化的アイデンティティに応じたエンド・オブ・ライフ・ケアを享受できることが望ましい。

ヨーロッパにおいて文化に関するトピックは、エンド・オブ・ライフ・ケアの研究の中で、プライオリティが非常に高い位置づけにある[1]。これは、宗教や民族など多様な文化背景の文脈の中で出てきたものと考えられるが、外国にルーツのある患者だけでなく、人間の多様性(human diversity)を理解し、人生の最終段階という重要な時期に豊かなケアを提供するためには、ケア提供者の文化的な理解が必要となる。つまり看護師には、相手の文化的アイデンティティに対応したエンド・オブ・ライフ・ケアを提供する能力(文化的コンピテンシー)が求められる。しかし、看護師にどのような文化的コンピテンシーが求められるのかはまだ明らかでなく、どのようなコンピテンシーを伸ばすかという観点から教育プログラムが検討されていない。

## 2. 研究の目的

人生の最期の時期(エンド・オブ・ライフ)の過ごし方は、生まれ育った文化に影響される。日本には西洋と対照的に、個ではなく、家族をはじめとする人とのつながりを重視するという文化的特徴がある。本研究は、わが国の文化に根差した日本版エンド・オブ・ライフ・ケアを提供するために必要な看護師のコンピテンシーを明らかにすることを目的として行った。さらに、そのコンピテンシーを元に、日本版エンド・オブ・ライフ・ケアを提供するために必要な看護師のコンピテンシーを高めるための教育プログラム(案)を検討した。

## 3. 研究の方法

- (1) コンピテンシー作成のための準備として、まず、文化的コンピテンシーに関する概念整理を行った。文化的コンピテンシーに関する内容を扱った論文および成書を精読し、本研究で扱う概念の焦点化を図った。次に、看護師の文化的コンピテンシーに関する概念整理を行った。具体的には、インターネット上に公開されている医学論文のデータベースであるPubMedを用いて、2011年以降に公開されたシステマティック・レビュー論文を検索し、看護師の文化的コンピテンシーの定義、含まれる要素を整理した。文献レビューの結果から、本研究におけるコンピテンシーの概念化にあたり、Campinha-BacoteのCultural Competenceモデルが大いに参考になると考えられたため、このモデルについて精査するとともに、関連文献を検索し内容を査定した。
- (2) エンド・オブ・ライフ・ケアで求められる文化的コンピテンシーに関する概念整理を行うために、2011年以降に公開されたシステマティック・レビュー論文を検索し、エンド・オブ・ライフ・ケアで求められる文化的コンピテンシーの定義、含まれる要素を整理した。
- (3) (1)と(2)の結果をふまえるとともに、わが国におけるエンド・オブ・ライフ・ケアの概念に関する論文を概観したうえで、日本版エンド・オブ・ライフ・ケアを提供するために必要な看護師のコンピテンシーを操作的に定義し、コンピテンシーの要素を作成した。
- (4) 日本版エンド・オブ・ライフ・ケアを提供するために必要な看護師のコンピテンシーを高めるための教育プログラム(案)を作成するため、看護師のコンピテンシーを高めるための教育的介入の効果を検証したシステマティック・レビューを検索し内容を査定した。その結果と(3)の結果をもとに、教育プログラム(案)を効果的な学習を促すカリキュラムの枠組みを検討した。

## 4. 研究成果

- (1) 文献検討の結果、文化的コンピテンシーを表す用語として、「cultural sensitive」「cultural competent」「transcultural care」など様々使われているが、主として米国で使われている「cultural competency」が、これまでの研究の流れや背景を組んでおり、用語として妥当であると思われた。文化的コンピテンシーに類似した用語の定義には、「cognitive」「implementation」「outcome」など複数の要素があり一定していないという結果から、いずれかに焦点化したうえで研究を遂行することの必要性が示唆された。さらに「cultural competency」の概念モデルとしては、教育モデルと文化的アセスメントモデルの2つがあることがわかった。この2つのモデルの共通点は、それぞれの文化に関する情報を明確にしていた。それによりその文化に関する知識が蓄積され、文化的コンピテンシーの高い医療者の育成につながると考えられる。自己の文化に対する気づきを促すことも2つのモデルに共通する基本的前提であった。

次に、看護師の文化的コンピテンシーに関する概念整理のため、検索キーワードとして“cultural competence” OR “cultural competency” AND “nurses” AND systematic reviewを用いて検索し、33件の論文が得られた。この中から、特定の民族を扱ったもの、特定の

疾患や技術に限定したもの、小児・精神・母性・救急など特定の領域に限定したもの、レビューした論文の理論的枠組みが述べられていない論文を除外して内容を整理した。どちらも文化的コンピテンシーを高めるための教育プログラムの効果検証を目的としたものであった。レビューされた論文のうち、文化的コンピテンシーの理論的枠組みとして用いられていたのは、Campinha-Bacote model(3件)、Cultural competent model(1件)、Ginger and Davidhizer transcultural assessment model and theory(1件)、Theory of cross-cultural communication(1件)、Leininger Culture Care Theory(1件)であった。以上のことから、看護師の文化的コンピテンシーの概念基盤として用いられている理論は様々であるが、Campinha-Bacote model が比較的多く用いられていることがわかった。

Campinha-Bacote model を精査したところ、このモデルは、Cultural awareness(文化的気づき)、Cultural knowledge(文化的知識)、Cultural skill(文化的スキル)、Cultural encounters(文化的接触)、Cultural desire(文化的欲求)の5つの要素から構成されていた。文化的コンピテンシーを高めるための教育プログラムの効果検証を目的としたレビューの中で、教育プログラムの共通要素として、これら5つの要素が挙げられており、網羅性の高いモデルであると考えられた。さらに、このモデルの定義ならびに要素から、「cognitive」と「implementation」に焦点化したものと理解できた。以上のことからこのモデルは、バランスの取れた質の高いモデルであることが示唆された。

- (2) 検索キーワードとして“cultural competence” OR “cultural competency” AND “end-of-life care” AND systematic review を用いて検索し、9件の論文が得られた。この中から、特定の民族を扱ったもの、特定の疾患や技術に限定したもの、小児・精神・母性・救急など特定の領域に限定したものを除外して内容を精査した。その中でレビューされた113の論文のうち、文化的コンピテンシーに関する定義が記載されていたものは60件のみであった。それら60件の論文で用いられた理論的枠組みは、(1)で用いられていたものと同様であり、エンド・オブ・ライフ・ケアに特化した内容に関する記載は認められなかった。このことから、既存の論文においては、エンド・オブ・ライフ・ケアにおける文化的コンピテンシーに関する統一見解は未だなく、個々の研究者により規定・測定されている現状が明らかとなった。本研究においてエンド・オブ・ライフ・ケアで求められる文化的コンピテンシーを検討するにあたっては、別のアプローチが必要であることが示唆された。本研究では、単なるエンド・オブ・ライフ・ケアではなく、「日本版エンド・オブ・ライフ・ケア」を主軸に据えているため、それを念頭に検討することとした。
- (3) 文献検討の結果をもとに、本研究における文化的コンピテンシーを「医療者が文化的文脈の中で質の高いエンド・オブ・ライフ・ケアを提供するための能力を得ようと絶えず努力すること、そのプロセス」と操作的に定義した。研究者間での討議の結果、本研究における日本版エンド・オブ・ライフ・ケアとは、日本人がdeath & dyingにおいて重要視していることを尊重するケアとし、Hiraiら(2006)が明らかにした日本人のgood deathをふまえて進めた。定義ならびに日本版エンド・オブ・ライフ・ケアの考え方、Campinha-Bacote modelの要素を組み合わせ、本研究における文化的コンピテンシーの要素を整理した。
- (4) 海外での看護師の文化的コンピテンシーを高める教育プログラムの効果検証をした研究において、用いられていた教育手法としては、講義、ディスカッション、ケーススタディ、ロールプレイ、デモンストレーション、シミュレーション、視聴覚教材の利用、リフレクション、集合研修後のニュースレターやSNSの活用など多岐にわたっており、それらの組み合わせ方や組み合わせる数なども様々であった。さらに、教育プログラムに要する期間やフォローアップの回数や時間なども、時間単位で行っているものから数週間かけて行っているものなど、研究により大きく異なっていた。これらの研究の課題として、文化的コンピテンシーに関する理論的枠組みは据えられているものの、教育に関する理論的枠組みは検討されていないことが挙げられ、文化的コンピテンシーと教育の2つの理論的枠組みを検討したうえで、プログラムを構成する必要性が示唆された。教育プログラムの効果という点では、いずれのプログラムもSelf-reportedレベルでは、文化的コンピテンシーはおおむね向上することがわかった。しかし、いずれの研究も、教育プログラムの詳細については記されておらず、どのような教育内容や教育方法が効果的であるのかについての示唆は得られなかった。そのため、教育プログラムの構成については、既存の研究よりも、文化的コンピテンシーの定義および要素に基づき、教育・学習に関する理論的枠組みに沿って検討することが、現時点での最良策であると考えられた。

結論として、今回の期間内では、本研究で当初予定していた目的を完全に達成できなかった。その理由としては、文化的コンピテンシーの概念や定義、ならびに文化的コンピテンシーを高めるための教育介入に関する知見が膨大であること、ならびにその膨大な知見が十分に整理されておらず、文化的コンピテンシーの定義や教育介入方法についてはまだ手探りの状態であることが挙げられる。

そのような中で本研究の成果は、看護師の文化的コンピテンシーに関する現在の研究動向の把握、日本版エンド・オブ・ライフ・ケアを提供するために必要な看護師の文化的コンピテンシーの定義づけ、ならびに文化的コンピテンシー向上に向けた教育介入研究の課題の整理の3点にある。今後は、これらを元に教育プログラムを開発・実施し、その効果検証をすることが必要となる。さらにその効果検証のためには、Self-reported という受講者による主観的な評価のみならず、より客観的な評価を可能とするための指標作成も求められる。さらに、医療者アウトカムだけでなく、患者アウトカムによる教育プログラム評価も大きな課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Masanori Mori, Tomoyo Sasahara, Tatsuya Morita, Maho Aoyama, Yoshiyuki Kizawa, Satoru Tsuneto, Yasuo Shima, Mitsunori Miyashita	4. 巻 27(4)
2. 論文標題 Achievement of a good death among young adult patients with cancer: analyses of combined data from three nationwide surveys among bereaved family members	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Supportive Care in Cancer	6. 最初と最後の頁 1519-1527
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00520-018-4539-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Tomoyo Sasahara, Michiyo Yamashita, Ikuyo Nagasaka, et al
2. 発表標題 JAPANESE UNDERGRADUATE NURSING STUDENTS' KNOWLEDGE, ATTITUDE, AND EDUCATIONAL NEEDS TOWARDS PALLIATIVE CARE: A CROSS-SECTIONAL SURVEY
3. 学会等名 International Conference on Cancer Nursing（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	酒井 禎子  (SAKAI YOSHIKO)  (60307121)	新潟県立看護大学・看護学部・准教授    (23101)	
研究分担者	水野 道代  (MIZUNO MICHIO)  (70287051)	筑波大学・医学医療系・教授    (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------